

都市とは建築の集合〈以上〉である

田路 貴浩 京都大学大学院 工学研究科

誤った都市論

建築と都市の関係を考えてみよう。

都市は建物の集合体ではあるが、それ以上の何かである。ところが、この「それ以上」ということが、未だに十分理論的に捉えられていないように思える。たしかにこれまで都市論はしばしば語られてきたし、論にあわせて都市像も描かれてきた。それらをごく大雑把に分類すると次のようにまとめることができるだろう。

- 1) 建築は都市に従属する(部分全体に従属する)
- 2) 建築の拡大が都市である(部分を拡大すると全体になる)
- 3) 建築と都市は相似形である(部分と全体は相似関係にある)

最初の〈建築は都市に従属する〉という命題は都市有機体論にみいだすことができるもので、古典主義建築理論と同形だといえる。古代ギリシア神殿では、建築のすべての部分の大きさは基本尺度の倍数によって決定されていて、それらがオーダーという型によって全体へと統一されている。諸部分のあいだには完全な調和的關係が与えられ、ひとつの美しい全体へと統合される。これを都市に適用した例としてすぐに思いつくのは、ル・コルビュジエの「輝く都市」であろう。輝く都市は人体をモデルとしていて、中枢センターを頭として、業務、商業、住居、工場などの諸機能が有機的に配置されている。

社会有機体論の起源はアリストテレスにまで遡るともいわれる。アリストテレスは『政治学』のなかで、家―村―都市国家(ポリス)の階層秩序を設定し、ポリスを最高の倫理的共同体と考えた^①。都市有機体論もこうした部分が全体に調和するポリスという理想を前提としているが、その理想に照らし合わせるなら、現代都市は許しがたい頹落状態にあることになるだろう。しかし、都市とはそもそもアナーキーな欲望の衝突の場ではないのか。こうした反論も当然あらわれてくるが、これについては後に触れることにする。

建築家が都市論を構想するときに陥りがちな過ちは、都市を巨大な建築とし

① 山脇直司「社会有機体論」、渡辺邦夫「ポリスの動物」『岩波 哲学・思想事典』岩波書店、1998年。

て構想することである。たとえば、ロン・ヘロンの「ウォーキング・シティ」(1964)。この歩く都市は、巨大な昆虫のようなまさに一つの都市有機体として描かれている。丹下健三の「東京計画1960」は東京湾の海上を横断する建築群であるが、ツリー状に階層化された交通インフラに建築群が木の葉のように接続されている。普通なら目に見えないインフラを海上の造形物として視覚化することで、ひとつの巨大な編み物のような建築=都市となっている。都市はたしかに編み物としてみることができるが、それは個々バラバラの糸が編み込まれたものであって、ひとりの建築家によって統制された糸が整然と折りなすものではありえない。都市と巨大な建築はまったく別物である。

都市有機体論と似ているが少し異なる考えに、建築と都市を相似形とする立場がある。クリストファー・アレグザンダーは都市構造を単純明快に分析し、計画された近代都市をツリー構造、自然発生的な歴史都市をセミ・ラティス構造として提示してみせた。アレグザンダーのいうツリー構造は上記の都市有機体論にそのまま当てはまる階層構造を指している。性質の異なる諸部分が相補的に全体に統合されるという構造である。一方、セミ・ラティス構造では、身の回りから、街区、地域へとスケールをシフトさせても、同じような特性が出現する。アレグザンダーと長年協働してきたニコス・サリンガロス(Nikos A. Salingaros)は自然のフラクタル構造にまで立ち戻り、都市のセミ・ラティス構造をフラクタル構造として捉え直し、同じフラクタル構造が建築にも当てはまることを示してみせた^②。建築と都市の相似形の議論はカミロ・ジッテにも遡ることができる。ジッテは建物によって囲まれて閉ざされた広場を住宅のリビングになぞらえ、スケールがまったく異なる都市と住宅を相似させている。

フラクタル構造を自然の根本秩序とし、建築も都市もこの自然の秩序に従うべきだとするサリンガロスの主張は、都市デザインや建築デザインのめざすべき一つの理念としては一定の説得力があるし、ある程度の妥当性も認めうる。しかし、建築と都市はただそのスケールが異なるだけではない。建築が集合して都市を構成するとき、そこにやはり決定的な質的差異が生じるのだ。ここを見逃しては都市の本質を語ることはできないだろう。

アナーキーな自然状態から法によるポリスへ

モダニズムが理想都市をひとつの有機体として論じたのに反発し、ポストモダニズムは現実の都市を直視し、そのバラバラな多様性を肯定する。コーリン・ロウは幾層にも重ね書きされた歴史都市の実態を「コラージュ・シティ」と名づけ、パッチワークのような継ぎ接ぎだらけの都市組織をむしろ称揚した。篠原一男はバブル経済で百花繚乱の建築デザインに沸いた東京を、景観破壊の議論をよそ目に「プログレッシヴ・アナーキー」として大胆に肯定した。こう

② Nikos A. Salingaros, *Principles of urban structure*, Techné, 2005.
Nikos A. Salingaros, *A theory of architecture*, Umbau-Verlag, 2006.

した主張の多くはポストモダニズムの哲学思想に触発されていて、なかでもドゥルーズ+ガタリが提示する「機械」の概念は建築—都市論に大きなインパクトを及ぼしていた。

ドゥルーズ+ガタリは「機械的 *machinique*」と「機構的 *mécanique*」を弁別する。「機構的」とは相互依存的な緊密な連結体系であり、それは有機体の特性に近い。それに対して、「機械的」とは独立する異種なものの近接関係をその本性とする^③。コラージュ・シティやプログレッシヴ・アナキーという概念は、これを都市論に展開したもので、都市は個々バラバラな建築が近接する集合というわけだ。たしかにバブル期東京の現状把握にはこの概念は有効だった。しかしそれをそのまま都市デザインの〈理念〉としてよいのだろうか。それはたんなる現状追認ではないのか。

③ ジル・ドゥルーズ、フレール・パルネ『ドゥルーズの思想』田村毅訳、大修館書店、1984。

個々バラバラなものが近接するとき、そのあいだにはしばしばハレーションが生じる。たがいにダメージを与え合う場合もあれば、いずれかが他を圧してしまう場合もある。もちろん共存共栄が望ましいことは間違いない。アリストテレスが人間をポリス的動物と規定したことの意図はそこにある。しかしアリストテレスはあまりにも性善説に立ちすぎている。村落共同体では一定の倫理を共有することは可能だろうが、都市というものが異なる価値観をもつ他者の出入りを最大限に許容する場所だとすれば、有意義な近接関係の構築を倫理だけに期待するのは無理であろう。そこにはルール、法が要請される。

日本の建築基準法は「建築自由」を基本原則としている。いかなる個人も他に迷惑を掛けないかぎりは何を建てても良いという原則であり、迷惑を掛けないという最低限の規制を法とするという考え方である。しかしこれでは、都市は単なる個々の建築の寄せ集めにしかない。個々の建築が集合することによって、単なる集合以上の価値を生み出すところに都市の価値があるのではないだろうか。

ジャン=ジャック・ルソーはそれを「社会」という言葉で考えた人である。個々人がそれぞれの欲求の充足だけを追求するなら、いっさいが自由な「自然状態」は「万人の万人に対する闘争」(ホブズ)へと陥ってしまう。ルソーはそうした最悪の事態を回避するために、社会という共同体を設立し、共同で安全を確保する契約を全員で結んだのだと考え『社会契約論』を著した^④。社会という全体に個人が主権を譲渡するというアイデアは、社会有機体論から全体主義へと繋がりがねない際どい思想ではある。しかし、単なる個の集合以上のなにかを、契約という形で、あるいはこれを法と言い直してもよいかもしれないが、そうした明示的なルールによって全体を〈仮設〉することは、生物のアナロジーから社会は〈本来的〉に有機体だと見なすこととは大きく異なっている。契約による社会の仮設を、ハンナ・アレントは人間のポリス的自由という角度から論じた。アレントは、人間は本性的にポリス=共同体を志向するというアリス

④ ジャン=ジャック・ルソー『社会契約論』樋口謹一『ルソーの政治思想』世界思想社、1978。E. カッシーラ『ジャン=ジャック・ルソーの問題』みすず書房、1974。『J.-J. ルソー 透明と障害』思索社、1973。

トレスの命題の意義を再考し、人間は相互に討議し、それぞれの世界像をすり合わせ、なにがしかある世界を共有しうる自由をもつと考えた^⑤。

都市とは

さて、ここまで都市とは何かを規定することなく都市と建築の関係を論じてきたが、やはり都市論を論じようとするかぎり、都市の概念規定を避けて通るわけにはいかないだろう。都市が建築の集合〈以上〉であるとするなら、それはどのように定義できるだろうか。

都市には、都市交通、都市衛生、都市気候、都市経済、都市政治など多種多様な側面がある。建築から都市へと視野を広げた途端に、対象はいっきに複雑な錯綜体となり、ひとつの視点から全体像を描くことは不可能となってしまう。しかし、もう少し引いた視点に立つなら、都市をハードとソフト、そしてアクティビティの三者の合成と捉えることができるだろう。つまり、都市とは〈都市組織〉という物的な構築環境を舞台とし、そのうえで〈社会組織〉という人間の諸関係が繰り広げる〈都市活動〉の総体と規定することができる。

構築環境 built environment のことを都市史研究の用語である都市組織 urban fabric と言い換えることのねらいは、構築環境の諸要素が高度に組織化されていることに注目するからである。たとえば、インフラ、とくに上下水道、電気、ガス、通信などのインフラは厳密なツリー状の組織体系として構築されている。これらは地下ないし空中に敷設されているのに対して、地表面は道路と道路によって囲まれる街区によって組織化される。紀元前5世紀のヒッポダモスによる計画都市ミレトスは、格子状街路パターンで整然と組織化された都市として知られる。中国でも儒教の経典『周礼』を典拠に条坊制が生まれ、日本に伝来する。

平安京の条坊制を見るかぎり、道路—街区組織にくらべて街区内の地割りの組織は相対的に不安定であった。当初は40丈(約120m)四方であった町は四行八門制の二面町に区画されたが、しだいに道路沿いの敷地の価値が評価されるようになり東西南北四面のすべてに間口を開く四面町へと移り変わる。そして、通りを挟んだ町という社会組織が重なって両側町へと発展した。しかし、近代になって土地の売買が自由化されると、敷地の分筆・合筆が流動化する。ましてやその上に建設される建物と隣棟との関係は希薄になっていく。

都市組織を構成する最小単位はひとつの敷地とその上の建物からなる都市要素と考えることができる。近代とは都市要素間の隣接関係が希薄化していく過程のことであって、レム・コールハースはこうした現象の典型を、周囲から隔絶された孤島のように、隣地とは無関係に建ち並ぶマンハッタンの摩天楼に発見したのだった。一方、槇文彦の「代官山ヒルサイドテラス」は都市要素

が密接に連坦して有機的な都市組織を形成する代表例としてたびたび挙げられる。個々の建物は建物外部のオープンスペースによって多様に縫い合わされ、場所の意味が細やかに織りあげられる。敷地と建物からなる都市要素はマンハッタンのように隣地と断絶するのではなく、むしろ積極的に隣地に開いて関係をつくり出している。都市要素にはこのように敷地の特性と建物の特性が複合した組成があって、どのような都市組織が生成するかはこの都市要素の組成に大きく左右される。

一方、都市の社会組織は血縁的・地縁的組織に加え、政治的・経済的・文化的・(狭義の)社会的な目的的組織など様々な種類があり、それらは生まれては消え、消えては生まれる。都市のなかでは、社会組織から完全に独立した個人というものは存在しがたい。個人は家族をはじめとして、学校や社会、サークルなど幾重にも社会組織に所属する。それら社会組織はその活動の舞台としての都市組織を必要とするが、逆に都市組織は社会組織によって形成される。そのかぎりにおいて、都市組織と社会組織は互いに他の存在を条件づけているといえる。

都市では、都市組織と社会組織を基盤として様々な都市活動 urban activity が繰り広げられている。そのなかで都市要素に関わる都市活動には、「所有」「建設・解体」「使用」の三つがある。「建設・解体」と「使用」は可視的な事象であるが、「所有」は通常それが可視化されることはない。しかし、都市要素の所有者がどのように都市要素を所有し、それをどのように使用するかは都市組織の形成に大きく影響する。

建築論的都市論の所在

建築論から都市論を論じようとする時、その焦点はまず第一義的には都市組織に置かれるべきだろう。社会組織から都市組織を論じることも可能だし、社会活動から都市組織を論じることもできる。先に述べたとおり、都市論を論じる立場は多種多様である。だから注意しなければならないのは、都市論を論じる立脚点と焦点である。建築論としては都市要素に立脚して、そこから社会組織や社会活動を視野に入れつつも、都市組織に焦点を合わせていくべきだろう。そのためにここでは若干の概念規定を試みたが、これはもっと鍛え上げられなければならない。日本の都市に真に都市デザインと呼びうるものが乏しいのは、都市形態を論じる日本語の概念の貧困に帰因する。アレントが述べるように、討議によって共通の世界を構築するには、討議のための概念整備が不可欠となる。都市論としての建築論はそこに所在することになるだろう。